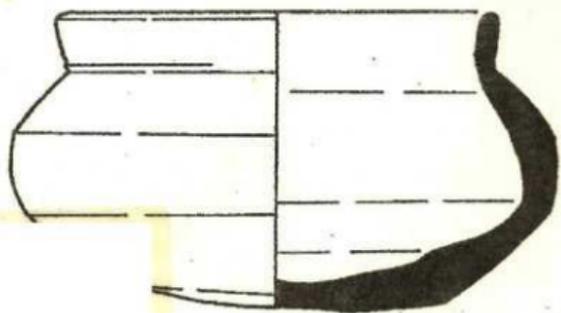


関西学院考古

第2号

構内古墳現状・遺物報告



1975.6

関西学院大学考古学研究会

目次

I. 調査にあたって	(北山)	3
II. 調査日談抄	(畠山)	5
III. 位置と環境	(小島・坂井)	7
IV. 調査の方法	(岩橋・小野・茨口)	10
V. 調査結果		
(1)古墳の外形	(小島)	12
(2)内部主体	(岩橋)	13
VI. 考察とまとめ	(北山・岩橋)	15
VII. 特論		
(1)上ヶ原古墳群の復元	(小島)	17
(2)関学古墳出土の遺物について	(北山)	23
(3)今後の課題	(岡野)	27
VIII. 調査参加者雑感		31
IX. あとがき	(北山)	33

図版目次 (巻末)

1. 西宮周辺遺跡分布地図——関学古墳の位置—— 1:50000
2. 関学古墳周辺の分布図 1:25000
3. 関学古墳墳丘実測図 scale = $\frac{1}{200}$
4. 関学古墳石室実測図 scale = $\frac{1}{40}$
5. }
6. } 関学古墳出土遺物実測図
7. }

挿 図

- 第1図 摂津国武庫郡甲東村上ヶ原古墳群分布図……………19
第2図 上ヶ原古墳群推定分布図……………21

表

- 装身具計数表……………25

I 調査にあたって

当関西学院大学考古学研究会はその周辺に存在する遺跡を調査研究の対象として研究会の主たる目的としてきた。その目的に遺跡は広く知られており、高池性集落として著名な五ヶ山弥生遺跡の地、古墳時代後期の群集墳が存在している。しかしこれら数多くの遺跡も、近年になって開発による遺跡破壊が進み、そのかす数十基といわれに上ヶ原古墳群・五ヶ山古墳群・仁川姐ヶ丘古墳群などの群集墳は、今では9基を残すのみである。

当研究会は、このような遺跡破壊の現状に対処するため、また研究会の関学周辺の遺跡調査研究の一環として、今回この関西学院構内古墳（以下関学古墳と略記する）の現状報告及び遺物実測をすることとなった。この関学古墳は昭和34年に西宮市史編纂のために武藤教授を中心として調査され、西宮市史に報告されている。以上のように関学古墳をめぐる状況の変化にもとない、また前回の調査の出土遺物で未発表のものを紹介するため今回の調査が行われた。

今後、関西学院大学考古学研究会の調査研究の一環として今回実測調査を行なった関学古墳のほか、他の上ヶ原古墳群や五ヶ山古墳群・仁川姐ヶ丘古墳群も、またこれら後期群集墳ばかりでなく、他の時代の遺跡遺物をも研究会の調査研究

の対象としていく予定である。

今回の調査にあたり、その調査時の構成は以下のように行いたい。ただし4年生の岡野・黒田、1年生の坂井の3人が総論調査で初日以外不在のため、今回の実習は3年生が中心となって行なった。

石室班 岡野慶隆・黒田昇司・北山勇・高橋さとと・岩橋信幸・杉本律子・坂井秀弥・田中英子・小野登茂子

環江班 小島周二・高山恵至・足立正彰・遠藤万恵子・赤口精

また11月23、24日の両日は大学院生岡本氏の指導協力を得た。

なお本書の執筆は、院生の岡野の他、北山、小島、高山、岩橋、坂井、小野、赤口が分担し、図版の作成については、各調査員が原図を担当し、岡野、北山、杉本、坂井が製図にあつた。(北山勇)

Ⅱ 調査日誌抄

11月20日(水)曇り

午後1時に集合、道具確認の後調査にとりかかる。石室と墳丘測量の2班に分かれ作業開始。石室班は石室内部の割り付けを行なう。なお石室内には、石室に使用された石が若干散在していた。ベンチマークをつける。墳丘班は基準線のレベルを求める。(71.165m)次に、道や建物の測量を始める。

11月21日(木)曇り一時雨

本日より両班とも本格的に実測を開始する。石室班は、奥壁、側壁、平面、玄室断面図の実測を始め、平面図のみ完了する。墳丘班は、25cmコンタで等高線を引き始める。途中雨が降り始め作業を一時中断した。

11月22日(金)晴れ

昨日と同様10時作業開始。石室班は、右側壁、奥壁、玄室断面図の実測を完了する。残りは、左側壁のみ。墳丘班は昨日に続き等高線を引き続ける。昨日同様雨のため一時作業を中断する。4時半に終了して道具を片付ける。

11月23日(土)晴れ

昨夜の雨で足下がびしょ濡れだったがそれほど作業に障害とはな

らばかった。石室班は、左側壁の突測を完了し、石室内はすべと完了す。墳丘班は墳丘の等高線を終え、平板をA点からB点に移し、地形突測を始めるが、少し残り明日に回す。

11月24日(日)晴れ

地形突測の残りも午前中にすべと完了。石室の前で記念写真とり、道具を整理(今回の調査を終了した。(畠山恵至)

Ⅲ 位置と環境

関学古墳は西宮市上ヶ原関西学院敷地内の西北隅に所在し、現在西宮市の文化財に指定されている。古墳の立地する地域は六甲山系の東端の独立丘、甲山東麓からなだらかに傾斜する上ヶ原台地上で、標高80m未満の地点である。

同地最古の遺跡には、芦屋市朝日ヶ丘縄文遺跡があり、縄文前期及びそれ以前の石器の出土例があるが、^{註①}遺構は認められず、当時の状態を明確に把握することはできない。

弥生時代には、上ヶ原台地上において、その周囲部（標高20～40m）に六軒山遺跡、越水遺跡、岡田山遺跡等が存在するようになる。しかし、どの遺跡も遺物の散布が認められたのみで、調査により遺構が認められたのは、仁川蒸谷の北岸、標高130m～145mの丘陵上に立地する五ヶ山遺跡のみである。また、六甲山南麓地域では、五ヶ山遺跡と同じ系統にはいる標高100m以上の高丘陵性集落遺跡として、芦屋市会下山遺跡、同城山遺跡、神戸市伯母山遺跡、神戸市金鳥山遺跡などが知られている。^{註②} ^{註③} ^{註④} ^{註⑤}

古墳時代には、海岸線に近い平野部に前、中期の古墳が造営された。前、中期には神戸市の扇塚古墳、東求女塚古墳、須賀塚古墳、大正年間に消滅してしまった西宮市大塚古墳、瀬野山古墳、芦屋市では親王塚、金津山古墳等が造られた。

後期になると、横文式石室古墳の群集の形として山麓台地上に分布するようになる。巨視的に見た場合、六甲山系での後期古墳群は、東より、仁川とほまの3つの古墳群、八十塚古墳群の顕著な群集状態を示しており、それぞれいくつかの支群に分かれている。

仁川とほまの3つの古墳群は、仁川兩岸の上ヶ原古墳群、北岸の五ヶ山古墳群、仁川祖ヶ丘古墳群である。

上ヶ原古墳群は、開学古墳の地に、上ヶ原新水場内古墳、保正西宮高塚に移築された入組野古墳を含め、3基が現存するのみである。(しかし、もとは十数基が存在したといわれている)。また、現在の関西学院中学部付近には、平塚という前方後円墳が大正年間まで存在していた。この古墳は上ヶ原の3つの古墳よりはいくぶん時期が早いのぼる。

仁川対岸の五ヶ山古墳群には3基の横文式石室墳が現存しており、73年には新たに2基が発見された。また、祖ヶ丘古墳群は現在2基の横文式石室墳が存在している。ほかに、衣田神社の東方、御手洗川右岸の標高30mの丘頂上には奥足塚古墳が74年度に再度見られている。

下尾市八十塚古墳群は、西より、朝日ヶ丘、釜ヶ平、芝松町、甚楽園五輪町、剣谷という支群に分けられ、その総横の大きさにおいて広く世に知られた古墳群である。

また、世澤川以東においては、宝塚市長尾山系の古墳群が

西摂平野屈指の大群集墳として著名である。
(小島周二、坂井秀弥)

註①藤井祐介「朝日ヶ丘縄文遺跡」
芦屋市教育委員会 1973

②石野博信「小立壁と貯蔵室をもつ弥生住居跡」
関西学院史学Ⅱ 1967

③村川行弘・石野博信「会下山遺跡」
芦屋市教育委員会 1964

④村川行弘「芦屋城山遺跡調査概報」芦屋市文化財
調査報告第1集 芦屋市教育委員会 1959

⑤若林泰・斎藤英二「伯母野山遺跡」
神戸市教育委員会 1963

⑥石野博信「神戸市金鳥山遺跡」
古代学研究第48号 1967

⑦村川行弘「朝日ヶ丘縄文遺跡、八十塚古墳群」芦
屋市文化財報告第4集 芦屋市教育委員会 1966

Ⅴ 調査の方法

今回の関学古墳において実施した調査方法は、経緯調査と併行ない実測調査である。以下、その方法を順次述べていく。

(1)水準測量

本調査の水準基準は、西宮市役所の2500分の1の地図により、墳丘北東部の、 $P=69.9$ mの杭を利用した。

(2)平板測量

まず墳頂部に P_1 を設定し、墳丘の周位に任意に $P_0 \sim P_n$ を設定し、二点を基準として墳丘実測を行った。なお縮尺は、100分の1とした。

(3)石室実測図の作成

・平面図の作成

石室の主軸にほぼ平行するように、基準線 $P_0 - P_0'$ を設定する。(主軸方位の測定にはクリリキータを使用した。)基準線をもとに、石室最下段の平面図を縮尺2.0分の1で作成した。

・側面図の作成

基準線 $P_A - P_A'$ ($0. P = 71.165$ m)を設定し、基準線をもとに両側壁の側面図を縮尺2.0分の1で作成した。

・断面図の作成

横断面図及び炭道部断面図は、それぞれ P_{01}, P_{02} (P_0

から、+1.00m, +3.00m)を基準点として作成した。
(若橋倍幸, 小野登茂子, 汝口精)

V 調査結果

(1) 古墳の外形

開学古墳は、墳丘、石室ともにほぼ円状ととどめており、上ヶ原古墳群中唯一の貴重な遺構として知られてきた。以下地形図をもとに古墳の外形を述べてみる。

開学古墳の周辺には、南北に小径とほさんでい屋が建っており、古墳のすぐ東側には小川が仁川溪谷に向けて流れている。また、古墳の周囲にはそれぞれ小径が伸びている。このように古墳周辺の旧地形は明確とはいえない。また、墳丘の基底部付近は小径などによる封土の流失が認められる。墳丘の最高点付近も中心と思われる地点からずれているため、若干の削平が考えられる。墳丘の東側は、標高73、50mから72、00mにかけて急傾斜が顕著となっている。現在ではこの部分に地くずれや凹地がみられ、かなりの封土の流失が考えられる。また、奥壁付近には天井石の一部が露出している箇所があり、そこから大量の土砂が玄室内にくずれ落ちている。このように当墳は、墳丘、石室ともに保存状態がよいほうであるといながらも、日に日に荒廃する可能性のある古墳なのである。

以上、封土の流失などによる旧地形の微妙な傾斜を計るとは困難になりつつあるが、現状から判断していくと、当墳

は、西部で標高71.75m、東部で標高70.25mの傾斜地に東西の基底部を列せ、そこに直径約12.00m、高さ約3mの円墳を築造していると思われる。なお、埴輪列、葉石などの外部装飾的遺構はこの調査でみることが確認できず、封土の流米と考案に入れても、はじめてから存在していたと考えられる。(小島周二)

(2) 石室主体

開学古墳の内部主体は、主軸をN-12°-Wにとり、南に開口する狭長な平面プランをもつ右片袖式横穴式石室である。

石室の規模は、羨道部法断が若干凹状を損じていると思われるが、石室埋存長9.28m、玄室長4.98m、羨道埋存長3.28m、玄室奥壁幅1.5m、羨道幅(玄室入口)1.2mを測る。

石室内には、玄室北東隅上部の崩壊(こぼれ)部分から流入した土砂が、玄室奥壁付近にかかり堆積している。

玄室部には4枚の天井石を架構し、その高さは2.3mを測る。

玄室の両側壁は、角のとれに、やや大形の花崗岩によって、6~7段に横積みされ、左右からむすび合っている。石と石とのすき間には直径20cm程度の栗石と数多く用いている。

奥壁には高さ1.8m、幅1.5mの一枚石を用いている。

羨道は、高さ1.2m、幅1mのやや大形の石を縦積みし、羨門としている。天井石は1枚だけ現存し、羨道高は1.7mを測る。

羨道部は羨門部が狭く、入口付近になるほど幅広くなっている。

石室の石材は、六甲山系南麓の斎藤須通有の黒雲母花崗岩の河原石を用いている。

羨道に残る天井石には、近世のものと思われるくまびの痕跡が認められる。これから羨道部が破壊された時期を推定できるかもしれない。(岩橋信幸)

Ⅴ 考察とまとめ

閑学古墳は、上ヶ原古墳群の内ではただ土基だけ残存する貴重な古墳である。上ヶ原古墳群自体についての論究は後述するとして、ここでは当墳の特徴について若干の考察を加えることにしたい。

閑学古墳の内部主体については、いくつかの注目すべき点、がみつけられる。

1. 狭長の平面プランをもつ。

2. 石室には、左右からのもち送りが見られる。

3. 石室を構築している石材は、所々と共に河原石である。

4. については、ちばかに玄室幅指數3の五割り白石太一郎による石室型式互分の第Ⅳ型式にあ^註ている。しかし、玄室と羨道の互分は概然としており、しかも玄室長は、羨道より若干旧状を覆っていると思われるが、羨道長とウレまわっており、一応はこの型式互分にあてはまるものではない。

2. の石室のもち送りについては、3. の石材との間違からうかがえることができよう。石材のほとんどが河原石でしめられているが、その河原石で石室を構築する場合、壁を互直にするより、若干もち送った方が天井石も小形ですむ。

以上、石室部分についてみた場合、上記のように様々な要素がみつけられる。石室が構築された時期を定めることは困難

である。しかし、当墳は六甲山系南麓に群衆墳が造営された時期（6C後半）に構築されたものと思われる。

関学古墳とみられる場合、石室の形態からすると6C後半の様相を呈している。しかし遺物についてみれば、関学古墳は古くから開口しており盗掘をうけたと思われる。遺物が持ち去られた可能性が大きく、遺物がないと推定される。その残された出土遺物において、大玉の異なる金環が5個あることなどから少なくとも5人の埋葬されたと思われる。また当古墳から出土した杯がクとはじめ頃のものであることからすると追葬が行われたものと思われる。

古墳時代後期後半の古墳において、玉類の品類が減少していく中で、当古墳でそれらが豊富にみられることから、後期古墳でも古い時期の様相と兼ね備えていると言えるのではなかろうか。また、滑石製の勾玉についてであるが、滑石製の品類品は古墳時代前半期、特にⅢ、Ⅳ期の古墳に多くみられ、後期にはそれらが衰微していくのであるが、後期後半の古墳で勾玉、特に滑石製のものが出土しているのは珍しい。

以上、遺跡遺物から当古墳とみられる場合、6C後半に当古墳が造営され、第1次の埋葬が行われ、少なくとも7Cはじめ頃まで追葬が行われたと思われる。（北山房，岩船信幸）

註 白石太一郎 「畿内の後期大型群衆墳に関する一試考」 『古代学研究』第42・43合併号

Ⅶ 持論

(1) 上ヶ原古墳群の復元

はじめに

仁川をばさむる古墳群のうち、上ヶ原古墳群はこれまでの記録からみて、現在までにその破壊数が最も顕著な古墳群である。現存する古墳は、関学古墳と上ヶ原浄水場内古墳の2基にけで、過去の記録にあらわれる数10基ばかりの古墳は消滅してしまっている。これらの古墳は、神戸市上水道上ヶ原浄水場の建設工事（大正年間）と関西学院の移転（昭和4年）、およびそれに伴った住宅街の建築工事などにより破壊されたといわれている。そして現在ではこれらの古墳の元の位置さえわからない状態である。そこで私は過去の記録などから、上ヶ原古墳群の範囲と規模をここに復元してみようと思う。

I

上ヶ原台地周辺の遺跡が知られるようになったのは、紅野芳雄氏が『考古小録』を著してからである。『考古小録』は紅野芳雄氏が明治41年から、氏が昭和13年に死去するまでの約30数年間に行なった遺跡踏査を日記風につづったもので、これを昭和15年に田岡春逸氏が編集している。上ヶ原台地周辺の遺跡のほとんどが消滅してしまっている現在、

かつマの姿を復元する上で絶好の資料であるといえよう。その中から上ヶ原古墳群に関する記述を拾い出してみよう。

武庫郡甲東村上ヶ原甲山登山口下の野水近松張の際、二三の古墳を掘り当て土器類及び刀剣具類出土す。度々現場に行き発掘品を採集す。礎、坏、瓶、台付盤、鍍金鐙及び鍍金刀金具、素埴盤等。（大正3年5月）

甲東村上ヶ原新田小手に神戸上水道貯水池工事中にて日々多数の古墳が破壊さる。本日現場へ行き一古墳の破壊をみる。素埴高坏一箇出たるのみ。（大正4年5月9日）

以上の記述は現在の神戸市上水道上ヶ原浄水場付近の事といつていゝものと思われ、現存する浄水場内古墳周辺の調査が推測される。また、

遺跡上（上ヶ原新田墓地西方）に三箇の石塚止ら小なる古墳あり（以前は沢山有りしが如し）。又墓地東方に於いても約十四の古墳を認む。内三基は開口し居れど封土完存、他は封土破壊し石櫛露出す。大部は礫石を有せり。（昭和7年1月24日）

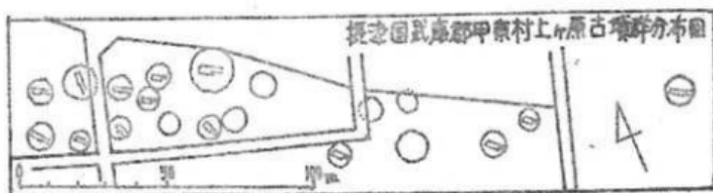
この文章にあたる現在の地点は、はじめの3基が仁川百合野町の住宅地から浄水場にかけての地点、後の14基は現在の関学古墳周辺で、現在の関学テニスコート、心理学研究館付近までの仁川溪谷に面した地点であろう。また、上述の内容と重複すると思われるが、

墓地東方松林中に散在せし十余の古墳は、今住宅地建設のため無残に破壊せられ、又破壊されつつあり。(昭和7年4月21日)

このように、『考古小録』からは古墳破壊の過渡期の状況が理解できる。

II

次に上ヶ原古墳群に関する資料としては、昭和9年6月発刊の『考古学』第5巻6号があげられる。この中には、小林行雄氏以上ヶ原古墳群の分布図を載せられている。
註③



『考古学』第5巻第6号「投石から見た古墳の様式」小林行雄より

しかし、古墳群の内容については何も触れておらず、またその位置も明らかでない。これによると、約50m×200mの地域に20基の横穴式石室が群集しているのがわかる。そして問題は小林氏の書かれた分布図が現在のどの地点にあたるかである。おそらくは関学古墳付近からテニスコート、心理学研究館にかけての地域であろうと思われる。石室の開口方向、石室の型式ほど興味深いのだが、現在の遺跡からは

これらの古墳群を想像することさえ不可能である。

次に、昭和28年には、現在の甲陵中学校正門の西方にあった入組野古墳という小古墳が調査されている。この古墳も調査のうち破壊され、現在では県立西宮高校の校庭に移植されている。また、上ヶ原古墳群の最東端には百又古墳という古墳があり、墓台が出土したといわれているが詳細は明らかでない。

III

以上により、上ヶ原古墳群の範囲及びその規模を考えたみたい。

上ヶ原古墳群は、その西端は現在の浄水場付近で、そこから東に仁川河畔に接して、仁川百合野町、関学古墳、関学テニスコート、心理学研究館にかけての密集、そして甲陵中学校付近に至るまでの東西約1200m×南北約500mの範囲を有していたものと思われる。次にその古墳の総数を概算してみよう。まず、『考古小録』からは、浄水場付近の約数基（浄水場内古墳を含む）、新田基地東二町の3基、基地東方の10数基（関学古墳を含む）が考えられ、小村行雄氏製作の分布図から20基（基地東方の10数基との重複が考えられる）、その他入組野古墳、百又古墳など。以上の事から上ヶ原古墳群は、記録からみれば30数基、その他を推定すれば約数10基の古墳の群集が考えられるのである。そして仁川

とはさんで存在する五ヶ山古墳群、旭ヶ丘古墳群との関係と考慮に入れると、この仁川とはさん群集墳は六甲山系において、芦屋市の八十塚古墳群に匹敵する規模の大きさを持っていたといえよう。



上ヶ原古墳群権記分布図 1:25,000
(湯古小館、志来分布図
をもとに作製)

おわりに

上ヶ原古墳群を考える場合にもう一つの注目すべき点は、群集の地点より約400mはなれる塚塚という横穴式石室を有する前方後円墳が存在していたことである。しかし、この古墳も大正頃に消滅してしまって詳細は明らかではないが、後期の前方後円墳であったと思われる。このように、上ヶ原古墳群の構造を理解するには、現在まったく手だてがない。だといままのままにしていたのでは古墳群が存在したことすら忘れられてしまう。そこで記録的であるにせよ、一つの群集墳の存在を認知してもらおうと思、たわけである。(1鳥取=)

註①武藤誠「考古学上からみる古代の西宮地方」
『西宮市史』第一巻 1959

②池野芳雄「考古小録」西宮市史会編 1940

③小笠原隆「技術から見た古墳の様式」
『考古学』第5巻第6号 1934

④武藤誠「西宮市上ノ原入船野に在る式石室古墳の
経緯」『関西学報』第5号 1959

(2) 関学古墳出土の遺物について
(昭和34年度調査分)

昭和34年に発掘調査された遺物は下記の通りであり、その当時の調査状況については西宮市史第1・7巻を参照されたい。

須臾器としては埴1個・埴1個があり、装身具としては金環5個・滑石製勾玉1個・埋木製象玉2個・碧玉製管玉9個・水晶製切子玉6個・ガラス製小玉36個があり、その他に鉄鍔4個・馬具(草帯留金具)1個、また埋葬遺骸つまり大腿骨のほか骨片、歯も出土している。

関学古墳出土の遺物説明

須臾器

- 埴……器形としては少く扁平な口頸部は少く外反しており、口頸部と器面外側の一部にヨコナデが施されている。また腹部から底部にかけて一部自然釉が付着している。この埴の口径は7.6cm、器高5.4cm、色調黒灰色、焼成は良好である。〔第7図〕
- 環……口縁部は少く外反し、その端部に丸味をおびており、内面と外面の一部(口縁部も含む)にヨコナデが施され、底部は未調整である。口径は10.7cm、器高3.7cm、色調青灰白色、胎土良好、焼成は良好であり、時期としては森浩一氏の編年

で第4型式にあたり、7世紀の初め頃と思われる。
[第7図]

装身具

勾玉—色調は黒灰色を呈し、材質は滑石製である。穿孔にあたり、2つの穿孔をあわせて1つの穴に1つあり、穿孔部周辺に方形のくぼみを両面に施してある。長さ18mm、厚さ5mmを測る。[第6図]

紫玉—大小2つのものであり、材質は埋木製である。色調は2つとも黒色を呈し、大きい方は最大径14mm、長さ18mm、小さい方は最大径9mm、長さ14mmである。小さい方は少し扁平につくられている。[第6図]

切子玉—材質は水晶であり、形状は六角形で穿孔はすべて一方向から為されている。[第5図]

小玉—材質はガラスで色調は青紺色を呈するもの18個、青色のもの10個、緑色のもの6個、黒色のもの1個、水色を呈するもの1個、計36個出土している。大きさは水色のものが径7mm、緑色のものが8mm前後である。その他の色調のものは4~5mm前後である。[第6図]

管玉—材質は碧玉製で、穿孔方法は双孔でほとんどが4.5~5mmで長さ13~18mmである。1つだけ径15mm、長さ35mmの大きいものがあり、これ

だけは穿孔方法が単孔による。色調は暗緑色のものがほとんど他に水色、青色のものが。おのおの1個ずつある。管玉の総数は9個である。^[第6図]
 金環材質はすべて銅合金類と思われるが、^[第5図]全体的に表面の金の剥離がひどく、4がも、とも表面がよく残る。マおり、その他では2が少し残っているだけである。[第5図]

なお今回の遺物の報告は西宮市史に発表された遺物を中心とし、鉄鏝、馬具及び未発表の遺物等は未整理のため次回に報告したいと思う。(北山勇)

遺物名	図面番号	色調	(最大)径 単位mm	高さ 単位mm	材質	備考
勾玉		黒灰色	厚5	18	滑石製	
紫玉	1	黒色	14	18	埋木製	
	2	"	9	14	"	
切子玉	1	白色透明	18	34	水晶製	
	2	"	16	32	"	
	3	"	17	33	"	
	4	"	16	27	"	
	5	"	16	25	"	
	6	"	15	23	"	
小玉		青褐色 緑褐色	4~8		ガラス製	計36個
管玉	1	暗緑色	15	35	碧玉製	穿孔は単孔
	2	"	5	28	"	穿孔は双孔
	3	青色	6	20	"	"
	4	水色	4.5	21	"	"
	5	暗緑色	5	17	"	"
	6	"	6	14	"	"
	7	"	4.5	13	"	"
	8	"	6	14	"	"
	9	"	5	13.5	"	"

全球	1	黑皮包	33.5	價	8	條花金表	
	2	"	31		8		
	3	"	30		6		
	4	PP白包	25		5		
	5	金包	18		5.5		

張表與計數表

(3) 今後の課題

以上開学古墳の石室実測調査の報告を行ってきた。もちろん今回の調査は、今後行う予定である上ヶ原古墳群、五ヶ山古墳群、畑ヶ丘古墳群等の後期群集墳の研究の第一段階であり、まだまだ歩みはじめたばかりである。ここでは、今後二水らの仁川をはずむ群の後期群集墳を扱う際におこる問題点を今後の課題として述べたい。

1. 群集墳の形成時期について

まず上ヶ原古墳群から見よう。開学古墳は出土した須恵器及び石室の型式からみて6世紀後半に築造されたものと考えられる。上ヶ原古墳群中、出土遺物の明確なのはこの1基だけである。また古墳群中、東よりに位置する入組野古墳はその石室形態から築造時期が推定できる。この古墳は全長2.3m、幅0.66m、高さ0.9mと小規模の無袖式橋穴式石室を有する小円墳である。昭和28年の調査では副葬品はほとんど検出せず、^{註①}出土遺物により、築造時期を決定することは困難であるが、その石室形態から7世紀に入るに^{註②}とが考えられるのではなかろうか。このように見ると、上ヶ原古墳群はほぼ6世紀後半から7世紀のはじめにかけて形成された古墳群と考えられる。

一方仁川村の五ヶ山古墳群1号墳では、7世紀はじめの須恵器が、^{註③}又畑ヶ丘古墳群2号墳からは6世紀の終り、^{註④}

ろの須恵器が出土している。このことにより仁川河岸の2つの群集墳とも、^{註④}ほぼ6世紀後半から7世紀のはじめにかけてが形成時期であると認められる。

以上のように仁川をほさむ3つの群集墳は、ほぼ6世紀後半から7世紀のはじめにかけて形成されたものと認められる。今後の課題としては、さらにくわしい形成過程の解明が望まれます。

2. 被葬者について

もちろん各古墳の具体的な被葬者をあげることは不可能である。又文献により直接特定の氏族を結びつけることも困難である。しかし抽象的ではあるが、一定次のようにおおまかに3つの群集墳の被葬者の階層を考えることができればなかなうか。

先述のようにこの3群集墳は6世紀後半から7世紀のはじめにかけて形成されたもので、この地域の古墳築造量の圧倒的な増加の時期にあたる。このような現象は他地方はもちろん、大甲南麓一帯や長尾山でも一般的に見られるものである。こう考えた場合被葬者はやはり古墳時代中期からの生産力増大により出現した有力な農民層としてとらえることができよう。そして彼らの居住地及び耕地としては仁川下流を含む武庫川西岸の井積平野が考えられる。逆にいえば、この武庫川西岸に農業経営を営む農民層が彼らの墓域として仁川を

はむすつり群集墳を形成したとも考えられるが、
1つには、これら群集墳が1つのまとまりとして、
名古墳群が1つの単位としての血縁関係、又は氏系関係、
は群集経営の關係が考えられるのではなからうか。

ところでこの武庫川西岸においてはその遺構が認められ
ている。この各段の進行年代を決定することは困難であるが
群集墳との関係も考慮しなければならない。

3. 前時期との関係について

武庫川西岸においてこの群集墳より時期の古いものとして
は、旧海岸線直上の大塚、福荷山の2古墳、そして上ヶ原台
地の車塚があげられる。いずれも墳丘は消滅しているが、前
方後円墳である。たと推定されている。そして各古墳の築造時
期としては、福荷山古墳が前期に、大塚古墳がそれよりも下
る前期に、車塚が後期の前半にそれぞれ築造したと推定されて
いる。特に前者の2基の古墳は古代の重要な港である津門に
立地することから、海上交通との関連が考えられる。車塚
は上ヶ原古墳群真北に存在し、見方によっては上ヶ原古墳群
甲に入れることもできるが、その築造時期は群集墳が形成さ
れる以前のものである。上ヶ原古墳群とはじめとする群集
墳を考えた場合、関連づけられるものは、まずこの車塚であ
らう。車塚の裾野をみると、上ヶ原台地より築ける武庫川
西岸の平野に築かざる、という築造が考えられる。そして間

もなく卑土真直に形成される群衆境の被葬者は、この豪族の支配下の農民層とも推定することが出来るのではないだろうか。

以上のように今後の課題として2, 3の問題点をあげることもできたが、このほかまだ見のがしている点もあると思われる。ともかく今後の課題としては、この地域における後期群衆墳築造の背景を浮きぼりにすることにあるといえよう。(岡野慶隆)

註①「埋蔵文化財調査記録」『西宮市史』第7巻
1959

②『西宮市史』には2号墳と記されている

③「埋蔵文化財調査記録」『西宮市史』第7巻
1959

④『仁川祖ヶ丘古墳群調査報告』
仁川祖ヶ丘古墳群調査委員会 1972

⑤渡江久雄『条里制の研究』創元社 1968

⑥「考古学上から見た古代の西宮地方」
『西宮市史』第一巻 1959

⑦『日本書紀』神功皇后摂政元年二年条「更遷務古水門而卜之」、同、神天皇三一年八月条「築築於武庫水門」。

VIII 調査参加者雑感

未熟ながらも、どしどし失敗しながらも最後まで何とかやり
とおすことができた。今後とも開学周辺の遺跡を研
究対象としてやっていきたい。 (小島周二)

考証に入るとはじめての仕事で、いっぺんはレベルや
平板を使い、何とか実測することができた。何もかもが、は
じめてのことで自己満足に終わったが、ここからも積極的に調
査研究に参加したい。 (畠山恵至)

僕は宝塚市の調査の為、第一日目しか出ることができなかつ
た。その点クラブの作業に通って参加することができず、
若干残念である。僕としては、夏休み雲雀ヶ丘の古墳の調査
に、1週間ぐらい出たので調査方法は一通り理解できた
ので、その復習に役立った。レベルや平板の使い方は、何
回も繰り返して体得せねばならぬことを痛感した。(坂井秀弥)

数日間の実測調査はただ単に参加したのみで、後は何もせ
ずにしまった。中金半端な無責任な作業に反省している。後
輩の今後の意欲的活動を大いに期待します。(高橋さとし)

4日間の英検調査のうち、参加したのは1日だけであった。
次回からは、積極的に参加しようと思う。(池田精)

数々の失敗を重ねながらも、はじめての学習中に強かに気が
した。とちかく精一杯やったという感が残っている。さし
て今後できる限り、やるのみである。(近藤万理子)

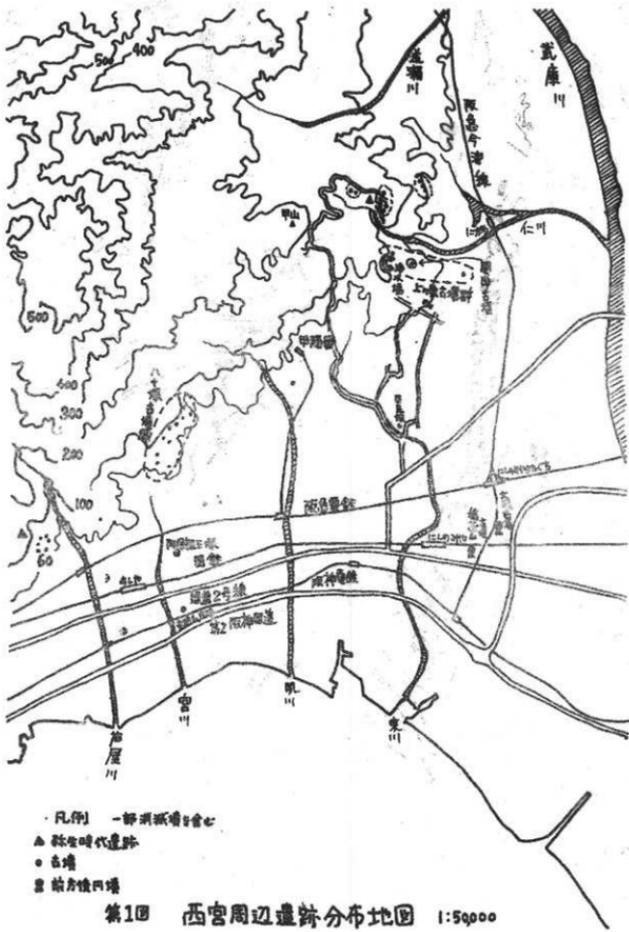
大学祭の騒ぎを並くに聞きながらの今回の調査は、非常に
しんどかったけれども、何もゆからない自分にとって、少
とも役に立てばと思う。これから積極的に参加しま
いきたいと思う。(小野登枝子)

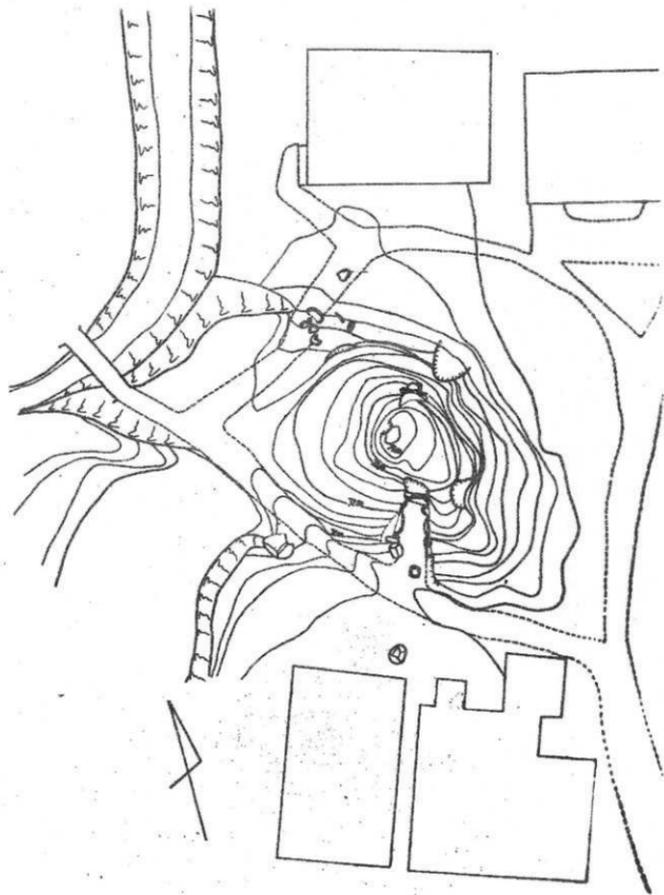
Ⅹ あとがき

昨年11月に関学古墳の実測を行ない、今年3月に報告書を作成、完了させるべきものでありましたが、我々編集責任者の怠慢で今日まで遅延してまいりました。今回の調査は実測調査のみで、遺物については前回の関学古墳の調査のものを参考してみました。しかし研究会会員一同は、調査、執筆いすれも不慣れでいろいろ不備な点はありますが、この調査報告が西根の群集墳研究の資料となり、また我々につづく後輩たちの礎になることを期待したいと思えます。また今年、当研究会が中心となって昭和47年に行なった雲雀山東屋根A支群の調査報告書が出る予定になっています。研究会の方針として、当面は後期群集墳研究を中心とし、将来は後期群集墳の調査研究ばかりでなく、今年報告書の出される高地性集落の五ヶ山弥生遺跡をはじめとする関学周辺の他の時代の遺跡及び関学所有の遺物について検討を加え報告していきたいと思えます。

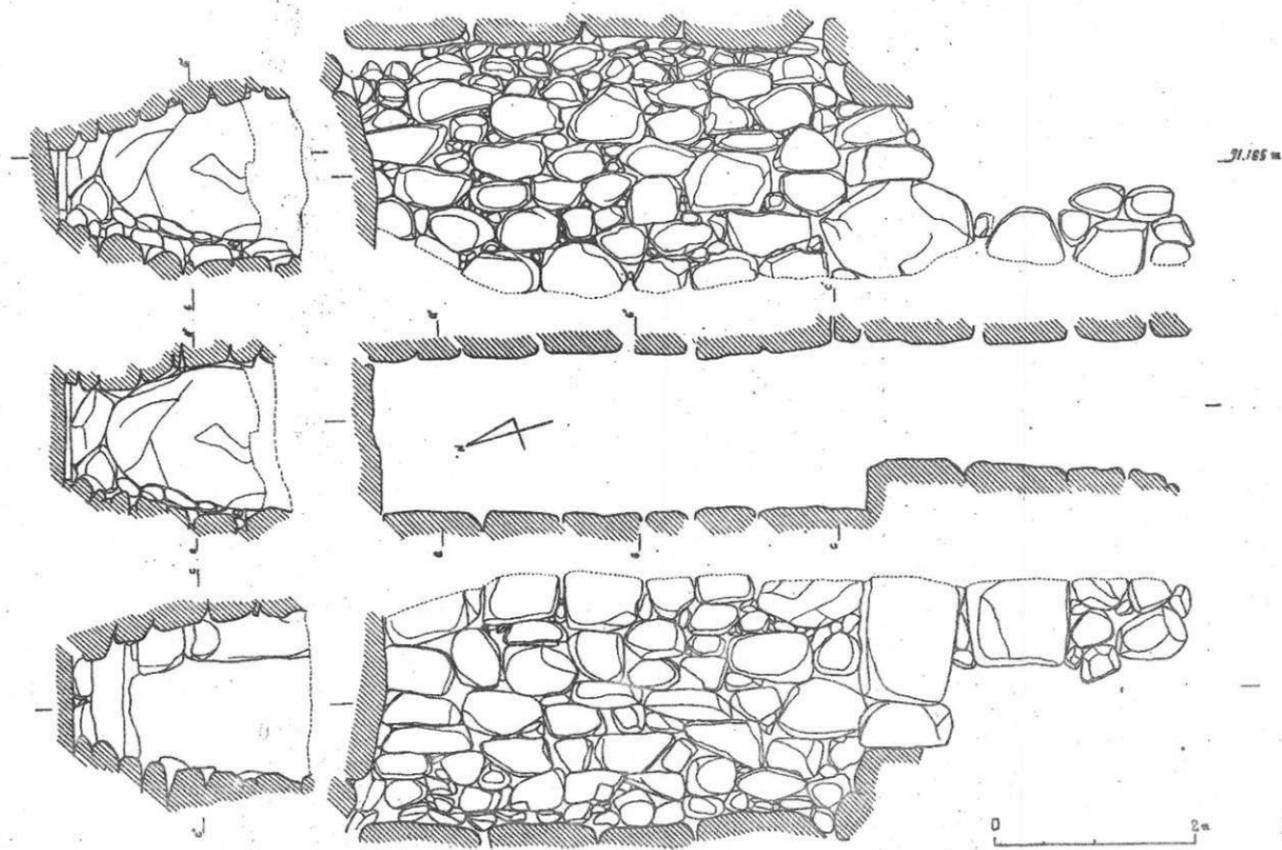
なおこの調査及び報告書作成にあたっては、武藤教授をはじめ先輩諸氏より、御助言、御指導をいただいたことを記し深く感謝の意を表します。(北山勇)





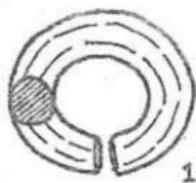


第3回 関学古墳地形実測図

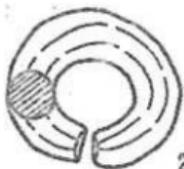


第4圖 間学古墳石室実測図(現状)

金環



1



2



3



4



5

切子玉



1



1



1



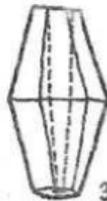
1



1



2



3



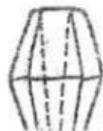
4



1



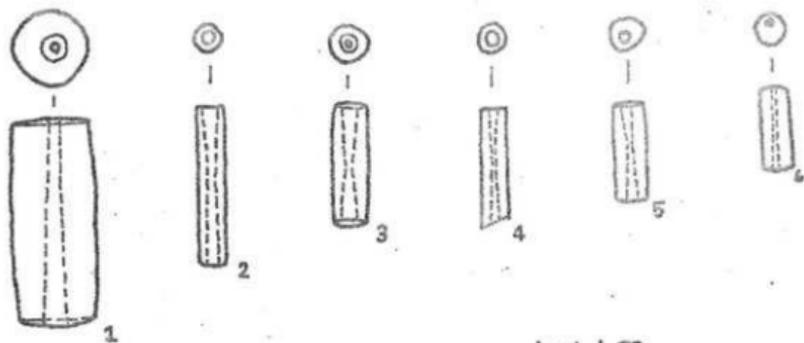
1



第5圖

出土遺物實測圖

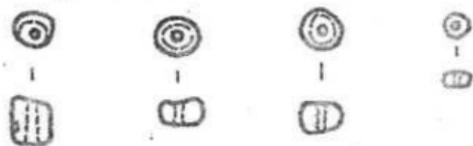
管玉



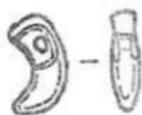
ナツメ玉



ガラス小玉



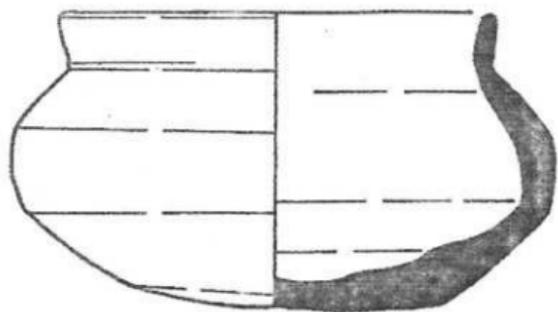
勾玉



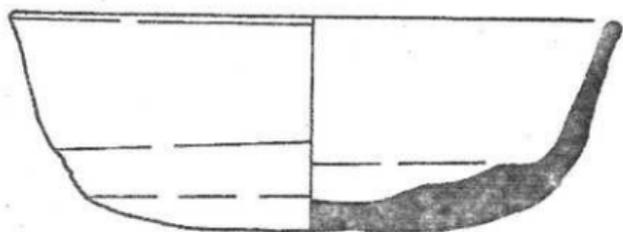
第6圖

出土遺物実測図

埴



坏



第7回

出土遺物実測図



廣西學院考古第2号

構内古墳 現状・遺物報告

昭和50年6月30日 発行

編集発行：廣西學院大學考古學研究会

代表 坂井秀雄
〒662 西宮市上ヶ原

責任者：北山勇

